地域の宝　但馬牛物語　★28★

ニーズに合った牛づくり

渡辺　大直

9月8日から9日に仙台に行ってきた。全国和牛能力共進会に出品している兵庫県代表団を応援し、全国よりすぐりの牛を見るためだ。

会場に着くなり出迎えてくれたのは、但馬農業高等学校の牛が「高校の部」で優等賞2席になった朗報だった。オリンピックなら銅メダルの好成績だ。会場で出会った他県の友も「但馬農高の牛は良かった。もう一つ上に行ってもいいくらいだ」とほめた。

この共進会は、生きた牛の姿や発育、枝肉という骨付き肉の大きさや肉質などを競い、和牛を改良しようと5年ごとに開催されている。オリンピックにさまざまな種目があるように、性別や月齢などにより九つの出品区があり、その中には1頭ずつで競う個人戦（個牛戦かな？）やグループで競う団体戦もある。

第3区と第4区の審査を見た。第3区は17～19か月齢の若い雌牛の区で、兵庫県はエース種雄牛「芳悠土井」の娘牛が代表だ。私が担当してた頃、但馬牛は体格の小ささが目立ったが、人並みのサイズになっていて、「但馬牛も大きくなったなァ」と思った。

第4区は、遺伝資源として貴重な特色を持つが、頭数が減り、失われる危険がある系統の再構築を目指すグループの出品区だ。現在の但馬牛は、美方郡でできた中土井系という系統が大部分を占めるが、城崎郡で生まれた城崎系の再構築に取り組んでいる。

審査会場ではジーンドロッピングという新たな手法を活用して、城崎系の影響の強い牛づくりに取り組む城崎和牛育種組合の活動も紹介された。城崎系の牛は一番小さかったが、背中の線がまっすぐで、肩から後ろのラインも滑らかで、繁殖能力の高そうな城崎系の特色を表した姿をしていた。

そんなこともあってか、審査講評では一番先に引き出され、城崎系の特色を持った牛づくりが高く評価された。帰りの時間が迫っていたので、このコメントを聞いて会場を後にした。

今回の共進会の成績は振るわず、「どうなってるんや」という声も聞いた。しかし会場で牛を見て、昔の但馬牛のままでなく、確実に改良が進んでいることも実感した。そんなこともあってか、共進会後の子牛市場価格は全国一の高値となった。

こうしたことは今までにもあり、但馬牛と全国の牛を評価する物差しの違いを感じる。しかし、独善的になると、子牛価格が全国平均を下回り、他所の血統を入れてはどうかという議論に発展した苦い経験もある。但馬牛の良さを大切にしながら時代のニーズに合った牛をつくっていくことが大事なのだとあらためて思う。

全国和牛能力共進会の審査の様子

全国和牛能力共進会に出品された但馬牛

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます